

ディケンズ・フェロウシップ日本支部 ニューズレター

2005年度の春季大会は6月11日、松岡光治氏のお世話で名古屋大学にて開催された。3つの講演がつづく内容の濃い大会で、80名を超える聴衆が、ディケンズ研究の面白さと広がり大きな刺激を覚えた。以下、大会の内容および諸報告をお知らせします。

春季大会

支部長は支部会員の論文が *Dickensian* に連続して掲載されていることを取り上げ、会員の活躍をたたえるとともに、今大会では片木篤先生（名古屋大学）およびDr Alan Dilnot (Monash University) をお招きして学際的な大会にできたことをうれしく思うと挨拶された。つづいて、Dickens House が Charles Dickens Museum に変更になったこと、デンマークとニュー・サウス・ウェールズ支部が新規に開設されたが、ヨーク支部が廃止となったこと、“Bleak House” (Broadstairs) が売却されたとの残念なニュース、それに2008年の国際大会はダラムに決定、日本支部が国際大会を引き受けるのはもう少し機が熟してからにしたいと述べられた。一方、「大事典」の編集作業は最終段階に来ており、出版社との交渉、イラストの版權などもクリアして順調に進んでいるとの報告があった。

1. 講演 (14:10~15:00) : 「ディケンズを聴く」

荻野昌利氏の司会の下で、佐々木徹氏（京都大学）は27年間に亘ってディケンズ作品吹込みのテープをことごとく聴いた経験をとおして、朗読は誰がうまくどこが聞きどころかを寸評を交えながら、楽しくかつ興味深く語られた。ディケンズは朗読されることを念頭において書いた作家であることを教えてくれる講演であった。

2. 特別講演 (15:00~16:00) : 「橋から見たロンドンの近代化」

松岡光治氏の司会の下に、片木篤氏（名古屋大学）は興味溢れるスライド講演をおこなった。氏は建築学が専門で『イギリスの郊外住宅』や『イギリスのカントリーハウス』の著者がある。ディケンズが^{ヤマ}鰻山のテクノロジー - 蒸気機関^{マテ}、鉄道、ガス等 - によって都市が近代化される時代を生き、そのような変容を作品に活写していること、橋は元々礼拝堂、市門、住居を擁する生活空間であったが、この時代に純粋な交通空間として鉄で作られるようになったことを指摘され、テムズ河にかかる橋を素材—構造—デザインの相関から見、更には絵画における橋の描写法を合わせ見ること、帝都ロンドンとその見方の近代化について語られた。

3. 特別講演および朗読 (16:20~17:50) : “Dickens and Australia”

西條隆雄氏の司会の下で、Dr. Alan Dilnot (Monash University) はディケンズ全作品中においてオーストラリアがどのように扱われているかをたどった。『デイヴィッド』より前の作品ではオーストラリアとの関係者は犯罪者のみとなっているが、『デイヴィッド』においてはじめて過去と袂を分かち、才能と勤勉に報いる希望の地にわたる人物が多出し、作品の主要テーマと深くかかわってくる。しかしミコーパー一家のように、新天地ですばらしい成功は収めながらも、心の中では故国における名声、信望、家系のことを思っているし、『大いなる遺産』を書くころには、オーストラリアはすでに囚人の国としてのイメージを抜け出しているが、それでもマグウィッチは一財産を作りピップを紳士にすることに全精力を傾け、新天地での成功物語を語ろうとしない。ディケンズが（実現しなかった）オーストラリア朗読旅行に出かけていたら新しい、新興国の物語が生まれていたであろうかとの想定に対して、ディケンズの小説はきっとイギリスに根を下ろしたのものとなろう、と彼は結論した。

10分の休憩後に「サイクスとナンシー」の朗読。めったに聞くことのできない劇的な場面の朗読とあって、会場は静まり返り、Dr. Dilnot の迫力に満ちた声の演技が聴衆を魅了した。体重を2ポンド減らしたはずの彼は、アンコールにこたえうる体力を保持していたが、時間の制約のためこれを断念せざるを得なかった。

4. 懇親会 (18:10-20:00)

本日の特別講演をしてくださった片木先生とディルノット先生の挨拶と乾杯の音頭をうけて、48名の会員が楽しい歓談のときを過ごした。この日のため、特別にポンチ酒が松岡氏の好意で用意され、またおいしい料理のかずかずと名古屋大学ビールなる珍しい飲み物もあって、なごやかな懇親会が繰り広げられた。二次会も荻野先生のお世話ですいぶん楽しい語らいの場となり、フェロウシップの友好は一段と深まり“Unforgettable”な一日となった。

諸報告

- (1) 『年報』への論文原稿(フロッピー・ディスクおよび清書原稿)は原稿用紙 35 枚以内、締切は 7 月 11 日(必着)です。
- (2) 記事・ニュースの締切は 7 月 30 日とします(原 英一理事宛にお送りください)。
- (3) 2005 年度総会は 10 月 8 日、甲南大学において開催します。研究発表の希望者は 7 月 20 日までに e-mail にて事務局までお申込みください。
- (4) 4 月にすでにご連絡いたしました、『年報』に掲載いたしますので皆様の業績報告をよろしくお願いいたします。また、日本におけるディケンズ研究書誌を作成するため、会員(および会員以外の方)2004 年度の著書・論文等の報告にもご協力をお願いいたします。送り先は下記の通りです。
できれば以下のウェブフォーム
<http://form1.fc2.com/form/?id=31664>
または松岡光治理事宛 (e-mail: mitsu@lang.nagoya-u.ac.jp)
に御報告いただければ幸いです。
- (5) 10 月 1 日~12 月 30 日の間、マイケル・スレイター氏が京都大学に客員教授として来られますので、講演等を希望される方は佐々木徹氏に連絡してください。ご要望に柔軟に応じてくださるそうです。
- (6) DF International Conference:
2006 Amsterdam (July 27-31)
2007 Philadelphia (July 19-24)
2008 Durham (July 23-28)
- (7) Dickens Fellowship の新会長は Gerald Dickens (2005-2007) です。なお、カンタベリーで開かれる国際大会申込締切は 6 月 30 日です。奮ってご参加ください。
- (8) 訃報: Marjorie Watts (2005 年 2 月 1 日)、K. J. Fielding (2005 年 5 月 20 日)。ご冥福をお祈りいたします。

以上

PS: なお、Dr. Dilnot は日本での全講演 + 朗読日程を終え 6 月 21 日に帰国しました。連絡先は次の通りです。

Dr. Alan Dilnot

Department of English, Monash University, Clayton, Victoria, Australia.

e-mail address: Alan.Dilnot@arts.monash.edu.au